

横光利一「上海」改稿の意味

江 後 寛 士

「上海」は横光利一の最初の長編小説であり、新感覺派から新心理主義への転換期に書かれ、かつ政治的現実世界を舞台にしているため、多くの問題を含んだ作品として注目されてきた。だが、解釈、評価ともに混沌としている現状である。その理由は「上海」という作品そのものに固定した評価を拒むようなところがあるからかもしれない。概して横光の作品は、毀誉褒貶の振幅の大きいものが多いが、「上海」はそれ以前のところで揺れており、作品解釈が定まらない現状と語りべきであろう。

例えば、古くは作者のことば通り新感覺派文学の集大成と言われ、最近では脱新感覺派の試みという逆の見見られるようになってきているが、この大きな対立点をどう考えればよいのか。「上海」を誤りなく見透すためには、こうした相反する基本線のいずれに位置づければよいのか。あるいはその両方にまたがる複雑な要素をもっているのか、栗坪良樹氏が動き続ける状況をとらえようとして入動小説^①だと言われたように、揺れているのは解釈ではなくて作品そのものだという循環論になるのだろうか。

揺れる第一原因は作者自身にあり、それは主人公参木像に如実に現われている。参木は死に魅せられたニヒリストであり、かつ、どうせ死ぬなら国のためというナショナリストでもある、矛盾した側面を同時に持っている人物で、作者はこれにマルキストやアジア主義者、国粹主義者などを配して、激動する国際都市上海の街頭に浮草のごとく漂わせるのである。一つの価値観、世界観がさまざまな生の局面を見せてくれる形ではなく、逆にさまざまな生の試みが一つの世界観に収斂していくという手法でもない。また、あるべき価値観を見失い、意志と行為との分裂によって自己喪失へと陥ってゆく悲劇を描いているのかと思えば、祖国をおもう心情や反マルキストの言辭によって別の側面を見せるといった描き方になっているのである。ニヒリストにしてナショナリスト、自己喪失の果てに死に魅せられていながら、同時に八俺の身体は領土なんだ^②と信じて侵略政策を擁

護するという不可解な人物像を横光はどのようにして造型したか。「上海」が論じられるとき、いつも課題として残されている初出(昭3く6)と初刊本(改造社、昭7)と決定版(書物展望社、昭10)との比較による改稿の問題点を考慮しながら検討していきたい。

「上海」は、昭和三年一月から六年一月まで、七回にわたって『改造』に連載された初出の時期によって扱われてきたが、「上海」(昭3く6)を論ずるに、決定版(昭10)の本文をもってするのは、いささかのずれを意識せずにはいられない。その期間中に「機械」(昭5)「寝園」(昭5)「紋章」(昭9)など、横光にとっては方法的にもまた思想的にも大きな変化を示した作品が書かれており、決定版(昭10・3)の出た直後に「純粋小説論」(昭10・4)が発表されていることを視野に入れるならば、初刊本(昭7)を経て決定版に至るまでの改稿過程、その表現差を無視するわけにはいかないだろう。拙稿「『上海』論序説」^③も、これを承知しながら、取り上げることができなかった。初刊本を入手できなかったことが言い訳がましい理由だが、その後「定本横光利一全集」全一六卷(河出書房新社)が出はじめて、第三巻所収の「上海」は、ありがたいことに初刊本を底本とされたので、三種の文章を比較検討することができるようになった次第である。

さて、まずは「上海」という標題にかかわることから見てゆこう。冒頭から三頁ほど読み進んだところで、上海の都市としての性格を次のように表現している。決定版では八甲谷はシンガポール^④の材木の中から、此の濁った底知れぬ虚無の街の上海に妻を娶りに来たのである。√と傍線部のように記しているのであるが、初出以下三種の文章を列挙してみると、その歴史がよく見えてくる。なお、初出(昭3く6)は⑤の略号、初刊本(昭7)は⑦、決定版(昭10)は⑧の略号で示すことにする。

⑦此の濁った支那の海港へ

⑧此の濁った支那の海港の上海へ

⑨此の濁った底知れぬ虚無の街の上海に

この改稿から二つの意味が読みとれる。⑦は、初めて単行本にまとめるとき標題を「上海」としたことに伴う加筆であること。念のため、初出七回分の標題を示すと、「風呂と銀行」(昭3・11)「足と正義」(昭4・3)「掃溜の疑」(昭4・6)「持病と弾丸」(昭4・9)「海港章」(昭4・12)「婦人」(昭6・1)「春婦」(昭6・11)であり、上海の雰囲気伝えるものは、△海港▽と△掃溜▽くらいのものであって、具体的な地名は意識して明示しなかったのである。作中においても、△此の海港▽△此の支那の海港▽という表現を用いて地名を避けている。次の書簡(昭3・6・15消印・推定)は、一か月の上海旅行(昭3・4)のあと、改造社から上海紀行を書くよう求められたのに対する山本実彦あての返事であるが、上海という地名を出さなかった意図が述べられている。

私は上海のいろ／＼の面白さを上海ともどもせず、ぼつかり東洋の塵埃溜にしてつて一つさう云ふ不思議な都会を書いてみたいのです。それには紀行でも、短篇でも書いてつたら、もう駄目ですから、ちくちくかかつて長篇にしたいと思つてゐるのですが、(以下略)

紀行でも短篇でもなく、長編にしたいということ、そして、△東洋の塵埃溜▽的な抽象化した△不思議な都市▽にしたいということであった。初出連載中は予定通りそれをずっと貫いて地名を出すことはなかったのだが、昭和七年単行本にするとき、標題を「上海」とした。その理由は序文に次のように記されている。

全篇を纏めるにあたつて、突然上海事変が起つて来たので題名には困つたが、上海といふ題は前から山本氏との約束もあり、どうしたものか自然に人々もそのやうに呼び、またその題以外に素材と一致したものが見当たらないので、そのまま上海とすることにした。

上海旅行をもとにして上海紀行を書くという約束以上のものが改造社との間にあったかどうかかわからないが、連載中のものを総称して△上海▽と人々にも呼ばれていたということもあって、自然に「上海」に落ち着いた結果、本文中も⑦のように地名を明記することになったのであった。前田愛氏ご指摘の、作中唯一の実際の地名△四川路の十三番八号▽も初刊本における加筆である。

地名を隠して△東洋の塵埃溜▽的な△不思議な都市▽を描くということは、虚構化された抽象的な国際都市を舞台に裸形の人間を漂わせることによって人間存

在の根源的問題の実験を可能にする。これは「蠅」「日輪」以来の新感覚派文学と同じ条件設定である。ぼつかりと東洋のどこかに浮んだ激動する国際都市、その中に銀行をクビになった風来坊の一人の男を投げ込む、その男の周囲には金と政治のために暗躍する男たちと、性と愛のからだ五人の女たちが配置される。これは新感覚派の諸作品において行われた試験管の中の実験に比べると、巨大な実験室の設定を企図したものと考えてよからう。上海のグロテスクな裏町や暴動の情景を描く新感覚派特有の文体とこの実験室の設定に注目すれば、新感覚派文学の集大成と言われるのも当然である。しかし問題はこの意図がそのまま実現できたかということである。

単行本にまとめる際の組みかえや芳秋蘭に関する大幅な加筆の問題も重要であるが、地名を上海と明記して標題にまで掲げることによって、抽象的国際都市の暴動であったものが五・三〇事件と特定できるようになることの影響はさらに重要である。そのためにマルキシズムとの対決の問題も文学的な実験室から政治的な現実の場へ引き出されることとなってしまった。文学の実験室とはいっても資本主義、帝国主義、民族主義、共産主義のような極めて政治的な問題を取り上げているのであるから、政治的現実世界への密着を避けることは本来困難だったはずではあるが、△上海▽と明記してそれがさらに不可避となってしまったのである。

しかし横光は、⑩においては、英国人排除を繰返し叫ぶシュプレヒ・コールやロシア人共産党員の名前や日本の企業名・団体名など、暴動の記録的な部分は全面的に削除して、再び現実から実験室への転換を図ろうとしているのである。⑩△底知れぬ虚無の街▽上海という修飾語の加筆は、こうした事情を象徴的に表わした例で、上海と地名を明示したものの、国策擁護、マルキシズム批判といった政治的な問題を現実から遊離せしめ、虚無的な虚構の世界を再構成しようとしたのではないかと思われるのである。結婚が未来へ向かつての一つの建設であるとすれば、甲谷の嫁さがしの希望も、△底知れぬ虚無の街▽では所詮実現しがたいものという暗示と実現不可能なものへの虚しい挑戦といったことが冒頭で示されることになった。この二度にわたる改稿の段階的な変化は、作品の成熟・深化に見合うものとして現われたと考えてよいだろう。

△虚無の街▽の主人公参木は当然ニヒリズムへの傾斜を深める。参木は、性格的には誠実にして善意に満ちた人である。山口のような、死人拾いをして妾を何人も蓄えたりえ、女を平気で売買できる人物や、材木の買いつけで一攫千金を夢

みる甲谷のような人物、あるいは中国人の妾になってトルコ風呂を経営するお柳や、白人の男たちを手玉にとるダンサーの宮子などに比べると、むしろ生真面目すぎるほどで、△東洋の塵埃溜△と言われる国際都市上海の渦中を生き抜くには似つかわしくない性格が与えられている。お杉を前にして△どうして好きな女には、指一本触れることができないのか△と自分でも不思議に思いながら、自由にしたい女を与えられても同じように生真面目に対応するので、山口や甲谷から△不可解なドン・キホーテ△と言われてしまう。参木が女に慎重なのは、長い間思いを寄せている競子の存在が抑制として働いていることもあり、一度触れたら妻にすべきであるという道徳観ゆえでもあるが、さらに△此の支那で、性に対して古い道徳を愛することは、太陽のやうに新鮮な思想だ△という考えを示して、みごとな△ドン・キホーテ△を真面目に演じてみせてくれるのである。真面目に演じるというやうな言い方をすると、どこまでが演技でどこからが本音なのかかわりにくい、この誠実さは横光のもつ体質と同質のもので、ひょっとすると、ドン・キホーテは横光自身であるかもしれないし、さらに言えば横光はそれに気づかずにただひたすら大真面目にやっているのかもしれないという重要な問題を含んでいる。他者を戯画化するときの批判と諷刺、自己を戯画化するときの反省と自嘲など検討すべきことは多々あるが、参木のもう一つの側面とあわせて考察しなければならぬ。

参木のもう一つの面とは、甲谷や山口、秋蘭など行動的な人たちに比べると、ただ一人内省的な人物として設定されている、言ってみればハムレット的な側面である。参木はひとりになると優しい手紙を書いてくる古里の母を思い出す、もう十年も日本へ帰ったことがない。その間、銀行の格子の中で専務のつくった預金の穴をベン先で縫わされていただけであり、他人の不正を隠蔽するための努力と忍耐が馬鹿げたことだと思ふやうになる△死の魅力△にひかれはじめ、△一日に一度、冗談にせよ、必ず死ぬ方法を考へ△とといったニヒルな面が濃厚に出てくることになる。参木が死への思いを深めていった事情は必ずしも充分には描かれていないので唐突な感じがするが、その後専務にたてついてクビになり、掃溜のような上海の街に失業者として放り出されるところからこの物語が始まると思えばよいだろう。クビになったのは、現金輸送車が暴徒に襲われる危険を専務に押しつけたためであった。△死の魅力△にひかれて参木ではあるが、暴徒に殺される死は拒否したのである。

自ら死を求めながら、しかし有意義な死でなければならぬとするのは、生者

の思想である。参木のニヒリズムはいかなるものか。クビになっても憤りはなく、また悲しみもないというニヒリズムを参木はもっている。あるいは、自分のちょっとした戯れのためにトルコ風呂をクビになったお杉に会ってその事実を知らされても同様であるし、文字通り路頭に迷っている女、妻にしてもいいと思つてお杉が何を話しかけてきても△今は何の感動も受けないであらう△と思つような、意識化されたニヒリズムを参木はもっている。しかし、その虚無の淵の深さは、どうせ死ぬなら中国人に殺されて母国の外交に有利になるやうな、有意義な死を願うことによつて、一挙に埋めもどされ、底は意外に浅かったと言わざるを得ないことになつてしまふのである。

やや酷な言い方になるかもしれないが、横光は、死に魅せられた男という一つのパターンを作り出せば、それで充分と考へていたのではないかと思われるふしがある。そうだとすれば、新感覚派の手法の欠陥がそのまま露呈したことになるだろう。いや、欠陥というストレートな言い方は慎まねばなるまい。「日輪」を△死の文学△（中村光夫）と評し、立木一本生きていないと見る人もあるけれども、パターン化され、モザイクのように模様化されることによつてはじめて見えてくるものがあるからこそ、新感覚派文学の存在意義があつたのだ。しかし、それをそのまま「上海」に適用すると欠陥として働いてしまふのである。△東洋の塵埃溜△のような抽象化された△不思議な都市△を創り出すつもりであつたのだろうが、現実の都市と実際にあつた事件をモデルにしたため、生々しい現実からの離脱、抽象化を充分には果しえなかつた。初刊本（昭7）の序文を見れば、このような結果になつた事情がわかる。△優れた芸術品を書きたいと思つたといふよりも、むしろ自分の住む惨めな東洋を一度知つてみたい△という意図があつたというのであるから、例えば川端康成の「雪国」のような、舞台は越後湯沢温泉だと知らされてもなお微動だにしない作品固有の世界をめざしてはいなかつたといふことになる。さらに語を継いで、知識ある人々でも△この五三十事件といふ重大な事件△を知らないし、興味もないやうだから、△一度はこの事件の性質を知つておいて貰はねばならぬ△と思つて書いたと述べている。つまり、執筆前の山本実彦あて書簡に見られる△ぼつかり東洋の塵埃溜にしてつて△抽象化する予定は初出の段階ですでに大幅に後退していたのである。この点は改稿によつてどう変つたであらうか。

初刊本における加筆は相當な量にのぼる。まともな加筆部分を列举すれば、芳秋蘭の登場を早めたこと、反欧・反共の東洋主義を黄色人種中心に進めるべき

だとする甲谷と銭石山の議論、山口とアムリによる反英・反共に関するインド情勢の分析、お杉の生い立ち、男装の秋蘭が参木に手紙を渡したこととスパイの嫌疑で殺されたという噂、アジア主義者李英村の手紙など、内容的には政治的なものが多く、日本が英米に対抗して東洋の盟主たらんとする帝国主義を擁護する姿勢が色濃く出ている。おそらく、五・三〇事件の八性質を知っておいで貰うための補強であると思われるが、主人公参木像も政治的には同方向の修正がなされている。次は単行本にするときの削除の例である。

⑩参木はピストルの把手を握つて工人達を見廻した。しかし、ふと彼は、彼自身、その工人達と同様に、資本の増大を憎まねばならぬ一人であることを思ひ出した。

と、彼の力は機械の中で刷れ出した。

何を自分は撃たうとするのか。撃つなら、彼らの撃たうとするそのものだ。——所詮、彼は母国を狙つて発砲しなければならぬのだ。

しかし、彼は考へた。

——もし母国が支那の工人を使わなければ、彼に代つて使ふものは英国と米國にちがひないのだ。(「掃溜の疑問」二)

失職した参木が紡績工場の警備の仕事に就いて暴徒と対峙したときのことであるが、右の傍線部はすっかり削除されたのである。内容は、参木が工人達と同様に資本の増大を憎み、ピストルを向けるべき対象は日本の企業のはずだと考える、反資本主義、反帝国主義的思想である。母国の資本の先鋒である銀行をクビになった直後であるから、それを敵視して中国の労働者と同じ思いに駆られるのは当然であるかもしれないが、プロレタリア文学に対抗する芸術派の第一人者であった横光が一時的にもせよ、参木にこのようなことを言わせたとは大変な驚きである。昭和初年、片岡鉄兵ら多数の仲間が左傾したとき、横光にも左傾の可能性があったが、上海旅行と「上海」執筆がこれをとどめたらしいと言われる。それを追認することになるが、右のような部分を全面的に削除し、また⑩「マルキシズム」といふのは、つまり人間を幸福にする機械だ(二七)のようなマルキストの喜びそうな部分は削除して、日本資本の進出こそ中国の眠っている資源を活かす最良の道なのだ、英米が支配すれば東洋はお終いだという、国策路線を強調する方向へ「上海」を書き直していく過程で、横光の左傾の可能性は完全に封じこめられていったようである。

このような政治的な観点からの改稿が初刊本では目立つ。だが、政治的とはい

っても政治的現実を離れて思想的次元への質的転換を試みた例がある。

⑪「君、此の工場を廻るには、ニヒリズムと正義とは禁物だよ。ただ豪快な悪だけが、機関車なんだ。いいか、勝てば官軍、負ければ賊軍。押すんだ。」(「掃溜の疑問」二)

⑫「君、此の工場を廻るには、鋭さと明快さとは禁物だよ。ただ臆臆とした豪快なニヒリズムだけが機関車なんだ。いいか、勝てば官軍、負ければ賊軍。押すんだ。」(二三)

⑬(前略と同じ)いいか、ぐつと押すんだ。考へちや駄目だぞ。」(二三)

この改稿を見ると、⑪ではニヒリズムは暴徒に対抗する手段、つまりは政治的手段としてしか扱われていない。そして⑫においてはニヒリズムは禁物だと言ひ、⑬では有効だと変更する。一体どうなっているんだと言いたくなるころだが、共通している点は、⑪では暴力には力をもって対抗せよと言っているのに対して、⑫では無力をもってせよと、力を基準にした判断がなされていることである。政治的力学である。しかし、相手陣営に対する認識は異なっている。⑪における相手が「豪快な悪」で対抗するしかない暴力的な力であるのに対して、⑫においては、「臆臆としたニヒリズム」という非論理で対抗することが有効な相手は「鋭さと明快さ」を備えた論理存在、すなわちマルキシズムである。論理に対抗する非論理であるがゆえに⑬では「考へちや駄目だぞ」と書き加えたのである。政治的力学であるならば、相手は中国共産党であるが、⑫の場合は、現実的な力関係ではなく、論理や主義という観念的思想的側面による対決に変えられているのである。このような改稿は、「上海」という地名を明示し、五・三〇事件を明らかにすることによって抽象的実験室が現実世界に変質してしまうのを防ぐためではなかったかと思われる。

現実から観念へ言ったように、右の高重のことばには、政治そのものから離れて思想的なものの根源に到らうとする方向性は認められるけれども、結果としては政治的議論の域にとどまっている。高重ばかりでなく、「上海」全体が五・三〇事件を背景とした政治議論小説とも言えるが、マルキシズムに対抗する帝国主義やアジア主義などの議論よりも、そうした状況の中でどのような生き方をするかという主人公参木のニヒリズムのありかたの方が重要な問題を含んでいる。

ニヒリズムが政治的に働けば無政府主義になるが、参木の場合は愛国主義へと傾斜していった。なぜであろうか。十年の無意味な人生のため、すでに「死の魅

力Vにとりつかれていた参木は、銀行をクビになっても飢えを心配するだけで、何ら憤りも感動もなく受け入れたのであった。しかし、失職して存在の基盤を失った参木は、いかに無為無職のものとも雖も、ただ漫然とあることでさへ、その肉体が空間を占めている以上、ロシア人を除いては、愛国心の現れとなつて活動してゐるのと同様であつた。(略)——俺の身体は領土なんだ。此の俺の身体もお杉の身体も。——Vと考へて、そこに自己の存在意義を求めようとする。ロシア人は革命による亡命貴族なので母国はないが、欧米人、日本人ともに母国の植民地主義にしたがつて進出してきているのである。無職でも口減らしとして役立つといふとはあまりにもみみっちい話だが、上海の外国人の人口を調べてみると、日本の進出状況がわかる。英国人が明治四三年以来ずっと四千人台、米国人が千人台で推移しているのに対して、日本人は、同年三、三六一人であつたのが、昭和五年には一二、七八〇人、昭和十年には一四、一八四人という急増ぶり、東洋の盟主たらしとする日本の野望の強引な推進の一端を見ることができ、次に見られるように、植民地主義がそのまま書かれている。

⑩ それぞれの人は、各自の本国が支那の富源を吸ひ合ふための、吸盤となつて生活してゐる。(「風呂と銀行」九)

⑪ それぞれの人は、余りある土貨を吸ひ合ふ本国の吸盤となつて生活してゐる。(九)

⑫ それぞれの人は死に接した孤独に浸りながら、余りある土貨を吸ひ合ふ本国の吸盤となつて生活しなければならぬのである。(九)

参木は死に魅せられた男であるが、否、死に魅せられた男であるからこそ肉体が八本国の吸盤Vとなつてゐる事実には依拠して有機的なつながりがあることを確認する必要があるのである。だが、この論理にしたがえば、死は国益に反すること、ひたすら生きることが愛国心の現れということになる。しかも八母国を認めずして、支那(⑦上海)でなし得る日本人の行動は、乞食と売春婦以外のVのである。現にお杉は売春婦に墮ちねばならなかつたし、ロシア人貴族の女も妾か売春婦としてしか生きる道はないのである。しかし、横光は参木を単なる八本国の吸盤V的の愛国主義者に安住させることはせず、⑩では八死に接した孤独に浸りながらVのように、ニヒリズムの影を加筆するのである。

参木は、高重に職探しを依頼しながら、八もうこの支那で、何か希望らしい希望か理想らしい理想を持つとしたら、それは何も持たないと云ふことが、一番いんちやないかと此の頃思ふんですがVと本心をもらすような、現実にはまった

く執着しない男のように見えながら、この逆説が一転して彼に愛国心を抱かせるのである。すべてを失つて残るのは身一つとなつたとき、肉体は母国につながつてゐることを知るからである。八俺の生きてゐるのは孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。Vと言うように、自分の身体さえ自己認識の手立てにならぬ喪失状態に追い込まれた虚無の極にあるとき、肉体は一挙に母国につながるのである。

横光は、愛国心は自己喪失、自己消滅という極度の不安から惹き起されるものであるとする。理由は、個の消滅を救済するのが母国であるならば、国に存亡にかかわる危機感が必然的に愛国心を呼び起すからである。参木は、紡績工場の警備をしながら、日本の先端企業の運命は同時に国の運命であると思ひ、暴徒に襲われる危険を国家的危機であると憂える。

⑬ 支那では、日本の紡績内に、此の支那の工人達のマルキシズムの波が立ち上つてゐるのである。母国の資本は今では挟み撃ちに逢ひ出したのだ。参木には、ひとり喜ぶ米国人の顔が浮んで来た。さうして、より以上にますます喜ぶロシアの顔が。——レセ・フェールの顛落とマルキシズムの抬頭。その二つの風の中で、飛び上つてゐる日本の昆虫。(「掃溜の疑問」二)

⑭ (前略) 日本の風。(二三)

この⑬の八昆虫Vとは、どのようなイメージであつたのだろうか。二つの風にあおられる弱々しい小さな昆虫だろうか。⑯で八風Vと改められて、みごとにイメージが浮び上つてきた。八レセ・フェールの顛落とマルキシズムの抬頭Vという二つの風にもまれて墜落しそうな日本という風。その危機感と同時に参木のものであるのだ。母国から遠く離れた掃溜のような国際都市上海の上空の風にもまれてゐる小さな頼りない参木という風、細いけれども強靱な糸が母国につながつてゐるからこそ、空高く舞い上つてゐるのである。糸が切れる不安、糸が切れてしまへば、塵埃溜に墜落し、自己は消滅するのである。

このような文学的な比喩的イメージによつて作品が成立すればよいのだが、この風のイメージも政治的議論の上に成立してゐて、危機感新田二つの風となつて現れた西洋の近代を一挙に超克するであろう母国への期待を生み出す。日本の資本はレセ・フェールのような無干渉主義ではなく、明治以来米国の庇護のもとに国家と一体となつて急成長してきたのであつたが、強引な海外進出の国策が激しい抵抗に會つて生み出す危機感心情的に愛国心をかきたてる。風のイメージは、国と個の存立の危機感を重ねて、愛国心をさらに増幅する上昇気流を生み出

す土壌となる。十五年戦争の悲劇を知る者は、横光がこうした趨勢をもたらす結果に無警戒である、というより、こうした状況を先取りして自己回復の基盤とし、しかも誠実な行為と信じて取り組んでいくことに不信の念を抱く。

山崎国紀氏は、「上海」における人社会性の獲得は結果としてナショナリズムを描くことにあったようだ⁽²⁾として、当時の田中義一内閣との関連を詳細に論じた上で、アジア主義者山口やインド人アムリのことばから、横光には他国領土に軍隊を駐在させることをよしとしない観念⁽³⁾があったことを引き出している。しかしながら、日本の軍隊を全面的に否定しようとする意識もまた明確ではない⁽⁴⁾として、結局は田中内閣の悪辣な他領への權益拡大政策に対して横光はやはり明確な批判性を持ち得なかった一人ではなかったか⁽⁵⁾と、横光の苦渋に満ちた立場を明らかにしている。そしてこの苦渋、あるいはどこか後ろめたいものを残した横光の意識⁽⁶⁾から参木像が生まれたというのである。横光は、「支那悔」(昭14・1)において、上海は人都会の形式は近代でも、住む人間が現代人であり、それぞれ本国の血を持ち寄って生活をする⁽⁷⁾と言っている。ここでいう近代⁽⁸⁾とは、共同租界による不思議な未来形を意味し、上海はあまりに新しくてまだ共同の論理がないため、現代人⁽⁹⁾は本国の血を持ち込んでしまうのだと言っているのである。ここに政治的立場以前の後ろめたさの根となる現実認識がある。

この後ろめたさは、秋蘭と議論をたたかわす参木の態度によく表れている。僕はマルキストのやうに、自分を世界の一員だと思ふことが出来ないだけの日本人です。⁽¹⁰⁾などと、一見論理的に見える非論理的な根拠によって日本の国策を一方的に擁護する。相手の秋蘭もマルキシズムの論理をふりかざしてはいるが、心情的にはナショナリストである。だから、二人はそれぞれの立場を主張しあうだけで、議論による深まりがもたらされることはなかった。

横光が二人にイズムを越えた電光石火の恋をさせたのは、こうした議論の果てに未来形としての近代⁽¹¹⁾の共同の論理の可能性を探るためだったと考えたいが、それは机上の空論、夢のまた夢であり、現実の惨めな東洋⁽¹²⁾は参木の心が羽ばたくのを許さない。

彼は彼自身の心が肉体から放れて自由に彼に母国を忘れしめようとする企てを、どうすることが出来るであらう。だが、彼の肉体は外界が彼を日本人だと強ひることに反対することは出来ない。心が閉ふのではなく、皮膚が外界と闘はねばならぬのだ。すると、心が皮膚に従つて闘ひ出す。(妙「海港」)

章「一、⑦⑩三五」

これは一つのラジカルなナショナリズムではあるが、いわゆる国粹主義——祖国につながる心情の純粹性を尊び死を絶対とする国粹主義ではない。これはニヒリズムと一体化したものであるところに特色がある。この点に関しては横光に迷いはなく、一字の修正もない。しかし次の箇所ではニヒリズムはさらに深められる。

④彼は彼の考へることが、自身が自身で考へてゐるのではなく、彼が母国のために考へさせられてゐる自身を感じる。最早や彼は彼自身で考へたい。それは何も考へないことだ。彼が彼を殺すこと——此の彼の見えない希望の前では銃器が火薬をつめて街の中に潜んでゐた。(「海港章」一)

⑦(妙)とはとんどう(同じ)。

⑩(前略)最早俺は自身で考へたい。それは何も考へないことだ。俺が俺を殺すこと。いや、総ては何でもない。俺は孤独に腹の底から腐り込まれてゐるだけなのだ。

此の彼のうす冷い孤独な感情の前では、銃器が火薬をつめて街の中に潜んでゐた。(三五)

参木は自殺を決行しようとしている自分が母国によって突き動かされていることを感じ、何も考へないという自己否定しかないこと、それを⑩では一人称に改めて強調し、希望⁽¹³⁾という逆説表現をやめて、暗く冷い救いようのない孤独⁽¹⁴⁾をストレートに示したのである。この加筆・修正は、予定した後篇の執筆をやめ、「海港章」の補筆である「婦人」「春婦」を繰り上げて、暴徒に追われた参木を売春婦に堕ちたお杉の部屋に落着かせる設定と関連するだろう。

秘かに思いを寄せていた競子の夫が死んだあとの展開を封じこめたまま、参木をお杉の部屋に逃げ込ませて一篇を完結させた。二人はともに地に落ちた肌ではあるが、母国の糸を引きずったまま、暗闇の中で結ばれ、思考を停止した、底知れぬ虚無の中で、ひとときの平安を得たのである。それは、ニヒリズムとナショナリズムが重なる地点であったと言えるが、確固たる安定した世界ではないのである。

以上のように見てくるならば、「上海」は初出から初刊本を経て決定版に至るまで、抽象化された世界から政治的現実の世界へ、そして再び抽象化へと揺れ続け、またニヒリズムとナショナリズムの間を揺れに揺れ続けたと言える。そして、ニヒリズムは「機械」「殺園」などに結晶し、ナショナリズムは「紋章」「旅

愁」へと発展していくことになる。

〔注〕

(1) 「上海」序(改造文庫、昭14・11)

私にとって長篇の初めであるこの作については感想も多いが、新感覚派と云はれた当時の私の最後の作でもあるから、(以下略)

(2) 山崎国紀「横光利一論」(北洋社、昭54・12)

(3) 栗坪良樹「上海」論の構想」(評言と構想」第五号、昭51・4)

(4) 抽稿「上海」論序説」(近代文学試論」第十八号、昭54・11)

(5) 前田 愛「SHANGHAI 1925—都市小説としての『上海』—」(文学」昭56・8)

(6) 上原 蕃「上海共同租界誌」(丸善株式会社、昭17・1)